

耀く体操服

松田 正弘

タカちゃんが走る。腕を大きく振って、小さな体を左右に動かしながら懸命に走る。五年生にして初めて、一人で五十メートルを走りきる。ゴールのところで、「タカちゃん、タカちゃん」と叫びながら、その手がちぎれんばかりにおいでおいでをしている太った女の子がいる。僕は保護者席から妻と一緒にその光景を見ている。タカちゃんがその女の子を指して、少しずつゴールへ近づく光景を見ている。女の子の胸には、「5-3 松田」と書かれたゼッケン。ゆうべ居間に吊るされていた体操服だ。タカちゃんの胸には、

「ひまわりぐみ 山本」と書かれたゼッケンが見える。

妻が、まわりのお母様方が、タカちゃん、がんばれ——！」と大声で応援している。

幼少期に心臓と直腸の疾患が判明した次女は、毎日欠かさず複数の薬を服用している。おかげで大きな発症は免れているのだが、それらの薬がもたらす副作用が彼女を苦しめていた。太るのだ。ごはんの量を控え、努めて歩くようにしているのだが薬の副作用には敵わない。とても太っているから当然運動が苦手である。だから運動会は彼女にとって苦痛以外のなにものでもなかった。個人競技はまだいい。自分がビリになるだけだ。けれど、クラス対抗の競技は地獄だった。いつも自分のせいでクラスが勝てない。そしてこの年頃の子供達は容赦がない。「また松田のせいで負けたやんけ！」……。

口下手で、自分から積極的に話しかけるような女の子でもない。風邪をひいて二、三日学校を休んでも誰も気にとめないような、そんな存在だった。お友達も出来ず、いつもひっそりと教室の片隅にいて、下校時も家までの道のりを毎日一人でまっすぐ帰って来るような、そんな娘だった。

ある日妻が、「奈央な、このごろ朝ものすごくぐずぐずするねん。毎朝追いたてるように送り出してる感じ。ちよっと心配やわ」と言った。不登校？……、僕の胸のあたりがざわざわする。

それからひと月ほど経った、運動会が近づいて来た頃だ。妻の口から思わぬ話を聞く。「給食食べたら毎日ひまわり組さんへ行ってるみたい」

「ひまわり組さん？」

「あ、知らんか。私らの時代にもあったやろ？特別支援学級。発達障害の子や知的障害

の子らがいる教室。ダウン症の子もいてる。一年生から六年生までみんな一つの同じ教室にいてるんやけどな、奈央、お昼休みに毎日ひまわり組さんへ行ってるらしいねん。ひまわり組さんは開かれててな、いつでも誰でも教室に入ってもいいってことになってるんやけど、まあほとんど誰も行かへんわな。けど、奈央はこの頃給食食べたら毎日一人でひまわり組さんへ遊びに行ってるらしいねん」

「え……、またなんでや？」

「クラスにお友達がいないんやろな。ある日、何を思ったか一人でひまわり組さんの前まで行ったら丸山先生が、あ、丸山先生はひまわり組の先生な。もうずっとひまわり組さんの担任で、丸山学級なんて呼び名もあるくらい。その丸山先生が奈央に声をかけてくれてはって教室に入ったみたいなんや」

「ふーん……、それがきっかけで毎日か？」

「うん、奈央が言うにはな、タカちゃんって

子に会いに行ってるみたい」

「タカちゃん？」

「山本貴之クン。私もよく知ってる。お母さんとは時々買い物の時にヒカリ屋で会ったりして話すよ。感じのいい人やで。タカちゃんはいつもお母さんにくっついてる。奈央と同じ年なんやけど発達障害で……。学力は幼稚園児くらいらしい。体も細くて小さくて一年生くらいに見える。でもお母さん、タカちゃんが可愛いんやろなあつてのは分かるような気がする。なんか、ホンマに可愛らしいねん。私が挨拶したら、はにかんでも、もそもそしながら小さい声で、こんにちはって……」

「奈央はそのタカちゃんに会いに行ってるわけか」

「うん、タカちゃん、なんでか奈央のことが大好きみたいで、いつも奈央が行ったら奈央ちゃーんって言って抱きついて来るんやで。奈央もタカちゃんが可愛いみたいで。あ

の子な、この頃ものすごく変わって来たんや。学校でのいろんな話をよくしてくれる。まあほとんどタカちゃんとか丸山先生とか、ひまわり組さんの話やけど、キラキラした眼で楽しそうに話してくれる。朝もぐずぐずせんと、元気に行ってきまーすって出て行くし」

給食を食べ終え、一人そと教室を出てひまわり組さんへ急ぐ奈央の姿を僕は思い浮かべる。そして、その時の彼女の心情を想像してみる。

『私を待ってくれてる人がいる』——その想いは、どれほど奈央を高揚させているだろう。自分が求められ、望まれ、必要とされているという意識は、どれほど奈央を奮い立たせているだろう。急いで給食を食べ、ひまわり組さんの教室へと向かう自身の歩みにどれほどの歓びを与えていることだろう。

もしかすると、これまでの学校生活の中で、奈央は初めて自分の存在理由を味わっているのかも知れない。

求められている場所へ、望まれている場所へ、自分の存在を歓喜をもって迎えてくれる人がいる場所へ、奈央はきつと味わったことのない歓びと使命感を携えて、力強く歩いているんだらうという確信に近い想像が、僕の胸を熱くしていた。

「たぶん、」と僕は言った。

「奈央は初めて、それも自分の力で、紛れもない自分の居場所を見つけたのかも知れないな」

運動会を一週間後に控えた頃、丸山先生から電話があつた。

「奈央ちゃんをタカちゃんの隣で走つてもらうようにしてはいけませんか？」

「どう思う？……妻の問いかけに答える。」

「奈央の気持ちを訊いて、奈央がしたいようにさせてやったらどうや？」

五年生、五十メートル走の最終組。五人が

スタートラインに立っている。真ん中の二人はタカちゃんと奈央だ。ひととき大きな奈央とちっちゃなタカちゃんが並んでいる。

ヨーイ、ドン！

奈央とタカちゃんが並んでスタートする。タカちゃんは小走りで奈央の後ろを追いかける。奈央は手を繋いだりしない。彼女は彼女で一生懸命走る。タカちゃんも懸命に走る。半分くらいまで来た。もうすでに彼の最長不倒記録だ。いつもタカちゃんは、スタートして五、六メートルで座り込んでしまう。そうなるともう駄目だ。テコでも動かない。結局二人の先生が両脇から抱え、ブランコのようにして彼をゴールインさせるのが毎年の光景だった。

けれど今、半分くらいまで一人で走った。奈央の背中を追いかけて、必死に来た。奈央はずいぶん先を走っている。

と、タカちゃんが突然座り込む。「ああ、ここまでか……。でもよく頑張った」。きつ

と誰もがそう思った。けれど、一人だけあきらめていない人がいた。途中で後ろを振り返り、座り込んでいるタカちゃんを見た奈央は、躊躇なく踵を返し走って戻る。座り込んだタカちゃんの二メートルくらい前で止まり、ここにこしながら、おいでおいでをし出した。あくまでもタカちゃんには触れない。

どれくらいそうしていたんだろう。僕はグランドの真ん中でいつまでもおいでおいでをする愛しい娘をじっと見ていた。

また突然だ。突然タカちゃんが立ち上がった。そして奈央を指し、ゆっくりと走り出す。奈央は小さく二、三度拍手をして、今度は腰のあたりでおいでおいでをしながら走り出した。時々後ろを振り返りながら。

奈央とタカちゃんの白い体操服が耀いている。眩しいくらいに耀いている。二人の体操服が小躍りするように同じリズムで揺れている。

先にゴールインした奈央は、しっかりと正

面からタカちゃんを呼ぶ。

タカちゃんがゴールインする。初めて一人で五十メートルを走り抜き、いま、ゴールインする。

タカちゃんのお母さんが泣きながら妻に頭を下げている。妻も泣いている。

「主人です」。妻が僕を紹介した。初めて会うその人は、とても凛とした女性だった。

「奈央ちゃんのおかげで貴之が初めて一人で走り抜きました」

そう言って彼女は、僕に向かって深く頭を下げた。

いえ、タカちゃんが奈央を救ってくれたんです。心の中でそう呟いて僕は、彼女より少しだけ深く腰を折った。

(京都府京都市)